

松永弾正 戦国を上り詰めた男 その気骨と反逆

信長を2度も裏切った男
久秀は天下の梟雄だったのか
令和3年6月21日 坪内 強

戦国三大梟雄

- **梟雄**きょうゆう。
- 梟(フクロウ)の様に抜け目がなく、昨日まで親類・縁者だった者でも平気で殺す**情け容赦のない英雄**
- 戦国時代に悪行・悪名をとどろかせた三人の戦国武将
- 1位 斎藤道三 21.0%
- 2位 織田信長 20.8%
- 3位 松永久秀 16.9%
- 番外 北条早雲

「麒麟が来る」
で信長のイメージ
が変わった

松永弾正久秀とは

- **天正5年10月10日**、松永弾正久秀が没した。
- 戦国を代表する梟雄の一人で、**織田信長**に二度も背き、最期は**爆死**を遂げたといわれている。
- **梟雄**と呼ばれ、信長から常人にはなしえない「三悪事」を働いたといわれた久秀。
- しかし、**革新的な発想**や**感性**の持ち主であり、茶の湯の造詣も深い教養人でもあった。千利休に学び、『霜台(そうだい)』の名で知られている。
- その久秀とはどんな人物だったのか。

- 松永 久秀は、戦国時代～安土桃山時代の武将。大和国の戦国大名。
- 松永 弾正の名で知られる。
- 弟に長頼、嫡男に久通、久秀の甥に松永家の姓を継承した永種（貞徳の父）が居る。
- 初めは三好長慶に仕えたが、やがて三好政権内で実力をつけ、室町幕府との折衝などで活躍した。
- 久秀は長慶の配下であると同時に、室町幕府第13代将軍・足利義輝の傍で活動することも多く、その立場は非常に複雑なものであった。

- また、長慶の長男・**三好義興**と共に室町幕府の**幕臣**として従事し、同時に官位を授けられるなど主君の嫡男と同格の扱いを受けるほどの地位を得ていた。
- 長慶の死後は**三好三人衆**と、時には協力し、時には争うなど離合集散を繰り返し、畿内の混乱する情勢の中心人物の一人となった。
- **織田信長**が義輝の弟・足利義昭を奉じて上洛してくると、茶器九十九茄子を差し出して**家臣**となる。
- その後、信長に反逆して敗れ、**信貴山城**で切腹もしくは焼死により自害した。
- 茶人としても高名であり、茶道具と共に**爆死**するなどの創作でも知られている。

太平記英勇伝の松永弾正久秀肖像画



高槻市の市立しろあと歴史館が発見した久秀の肖像画

薄い唇に前歯を二本出した親しみやすい顔立ちである。
知的であり、悪人のイメージとは程遠い。



名前	松永久秀
通称	松永弾正、霜台（そうだい）
誕生日	1508年
没日	1577年11月19日（享年68歳）
生地	不明 （阿波国・山城国西岡・ 摂津国五百住などの諸説あり）
没地	大和国、信貴山城
官位	従四位下、弾正忠・山城守・弾正少弼
配偶者	正室：松永女房 継室：広橋保子（広橋兼秀女） 側室：小笠原成助の娘(妻)
子	松永久通 長女（伊勢貞良室） 女（日根野弘勝室） 養子：松永永種
埋葬場所	奈良県王寺町の達磨寺とされる
墓所	奈良県王寺町の達磨寺 京都府京都市下京区の妙恵会墓地、 奈良県生駒郡三郷町など複数存在

信長の語った三悪行とは

- 徳川家康と対面した織田信長が、

- そばにいた久秀を

『普通の奴なら**一生涯**かけて**一つ**出来るかどうかという**大悪事**を、**三つ**重ねてやってのけた』

と言わしめた。

- 久秀は、その戦国の覇者たる**信長**にも二度に渡って**叛旗**を翻した乱世の梟雄である。

三悪 逸話

- 将軍(足利義輝)を殺し
- 主君の三好長慶の子、義興を殺し
- 南都の大仏殿を焼いた

三悪は後世のねつ造だった??

久秀は

三好長慶の子の義興も足利義輝も殺していない

大仏焼失もについても?

- **信長**自身も

1. **主君**であった織田信友を殺して当主に上り詰め

2. **将軍**・足利義昭を追放し

3. **比叡山**を焼き討ちにする

と、久秀の行いとほぼ同じ行いをしている。

- その為、信長は久秀を**悪人**と見ていたのではなく



自分と似た存在で見込みのある有力な武将

として見ていたのではないか

乱世を焦がした戦国の ダークヒーロー 松永久秀

- 「戦国の三大梟雄 (きゅうゆう)」の一人とされ、残忍な悪役であり
信長を何度も裏切った武将
- 近年の研究で、こうしたイメージは改まり、**主家に忠節**を尽くした姿が明らかになりつつある。
- 大河ドラマ「麒麟がくる」では、久秀が昔ながらの悪役、梟雄のイメージではなく、近年の歴史学の研究成果が反映されて、**魅力ある武将**として吉田鋼太郎さんが演じた。

「麒麟が来る」の松永久秀



松永久秀は何故梟雄とされたのか

- 三好長慶の書状、公家や僧侶の日記には、**久秀が長慶の命令を無視**したり、**背いた**という記述は見つからない。
- 足利將軍家や諸大名、公家との交渉役として、**長慶の意向に沿って忠実**に動いている。
- ずるがしこい梟雄としての久秀に関する逸話は、江戸時代初めごろに**太田牛一**が記した書物が元になっている。
- しかし、牛一は、自分が仕えた織田信長や豊臣秀吉を過大評価するため、久秀は信長に反抗して滅んだ愚かな人物として描いた。
- その後、主家に背く**下剋上の逸話**が創作され、家臣が主家に忠義を尽くすことを重んじた江戸時代中期には、半面教師として取り上げられるようになった。

「**信用ならない男**」『信長』

「自身の死に際を弁(わきま)えたような**さっぱりとした人物**」
『備前老人物語』

「年貢を治めなかった農民に生きたまま火をつけ、その様子を見て爆笑した」などの**残虐な男**。

「腕利きで優秀だが、その分**狡猾で欲深い**」
ルイス・フロイスの『日本史』

「文武両道の**優秀な男**だが、**ケチな性分**で欲深い」
『足利季世記』

それらの情報を総合すると、
久秀は「実務においては**優秀**な人物だが、心根としては**信用できない強欲な人物**」と評価されていた。

梟雄（きょうゆう）の人間関係

- 「信頼を置いてはならない者」「武将として高い才覚を持つが、その分危険な男」等の評価を受けている久秀。
- その高い能力や数多く残る記録から、**多くの人物と交流**をしていた。
- とりわけ、室町幕府十三代将軍である**足利義輝**とは、当初こそ敵対していたものの、義輝の京都復帰後は非常に親密な間柄になり、幕臣として高い評価を受けていた。
- 義輝は久秀に官位を授けるなど、その才覚を非常に高く買っており、久秀が躍進していった理由の中に**義輝からの寵愛**があったことは、疑う余地もない。
- また、義輝亡き後は**織田信長との交流**も盛んだった。
- また、道三に追い出された土岐 頼芸、頼次親子も久秀に身を寄せた。

柳生石舟斎

- そんな久秀の陣下に**柳生宗厳**、後の柳生石舟斎がいた。
- 彼は筒井順慶に属する小領主だったが、久秀に仕える。
- 大和の土豪で終わらぬために、久秀に期待と身を寄せたのだった。
- 幾度も繰り返された戦乱の中、**宗厳は久秀と共に戦う**。
- しかし信長の下に久秀は倒れ、大和は順慶の支配となり、更に秀次が領主となると秀吉の検地により領地を失ってしまう。
- 生活が困窮を極める中、**徳川家康**に、その剣技を披露する機会を得て「**無刀取り**」を披露する。
- その妙技に感服した家康は、その場で宗厳に入門する誓紙を出し、俸禄200石を給して、さらに自分の側に仕えるよう求めた。
- しかし宗厳は高齢を理由に出仕は断り、5男宗矩を推挙する。
- 徳川家の**剣術指南役柳生家**の誕生であった。

城郭建築の第一人者

- 天守を中心とした**城郭建築**の第一人者であり、**多聞造り**を創始した人物とされている。
- 城門と櫓を一体化させ防御力を向上させるという発想は、当時は非常に**革新的**であった。
- 天守の創始者とも言われている。
- また古代の**古墳**を破壊して築城した。古墳は高台や水濠を備えていたことから城に改造するには最適な地形であった。また大和国は数多くの古墳が存在した。
- ルイス・フロイスは、『日本史』において永禄4年の久秀の権勢を「天下の最高の**支配権**を我が手に奪ってほしいままに**天下を支配**し、高貴な貴人たちが多数彼に仕えていた」
- 「**偉大**なまた**稀有な天稟**（てんぴん）をもち、**博識**と**辣腕**をもち、**腕利き**であるが、**狡猾**である」と評している。

文化人にして大悪党

- 名刀や名品への**目利き**に優れ、多くの物品を収集。
- 久秀は悪党としてのイメージが強い一方で、非常に優れた**文化的知見**を持つ。
- とりわけ**茶道**の分野では、**古天明平蜘蛛**や**九十九髪茄子**などの名物茶器を所持しており、そのような知見は公家層からも一目置かれていた。
- 他にも「**不動国行**」に代表される**名刀**も収集しており、多くの茶器や名刀を用いて交渉に臨むなど、趣味と実益を兼ねた名品を賄賂として使う等中々にあくどい交渉の記録もある。
- 悪党のイメージの強い松永久秀ではあるが、彼は決して子悪党めいた人物ではなく、むしろ**文化的な知見**を兼ね備えたインテリ系の大者でもあった。



じんかん 今村翔吾

〈人は何のために生まれてくるのか／儚（はかな）く散るためだけに生まれてきたとでもいうのか〉

戦国時代の三悪人の一人として名高い松永久秀。その生涯を、絶望的貧困から立ち上がり、一国の城主として大成、さらに最後、織田信長に攻められ自害するまであまさず余さず描く。

松永久秀の出生と出自

- 『多聞院日記』の1568年(永禄11年)2月19日条で『当年61歳』との記載がある。
- 1508年(永正5年)生まれである事はほぼ間違いがない。
- しかし、出身地については、依然として諸説入り乱れている。

山城国（現京都府南部）の西岡説

- 現在の**京都府西京区**出身とする説。
- 久秀はとある**土倉**どそう（蔵を建てられるくらいに裕福な商人、金貸し、今で言う消費者金融）の家に生まれた。
- 松永久秀が主君である三好長慶に仕えたさい、京洛全般の内政や裁判を行う**奉行職**を任されたのは、久秀がそれだけ**京都の事情**に詳しく、**物事の計算**に優れていたからだと言われている。
- なお、山城国西岡といえはもう一人の梟雄である**斎藤道三**が若い頃に油商人・山崎屋庄五郎として大活躍した場所で、二人は顔見知りであるという俗説もある。

摂津国（現大阪府北部）の五百住説

- 近年では有力視されている説である。
- 摂津国五百住（よすみ。現高槻市）の約半町（50m）四方の水堀と土塁に囲まれた屋敷に住む、土豪クラスの出身と言われる。
- 江戸時代の書物『陰徳太平記』では、**摂津国五百住**の百姓の子供だった、と記されている。
- 久秀は、高槻の土豪・**入江氏**と懇意にし、その一族から養子として永種（ながたね）を貰っている。
- その永種の子で、江戸時代初期の俳諧師として名高い**松永貞徳**が『我が先祖は**摂津入江の末裔**』と言ったことも根拠の一つである。
- 貞徳が子につくらせた『**家譜**』には、貞徳の父・永種が元は高槻城主入江氏の一族で、入江盛重の妻・**妙精**は**久秀の伯祖母**であり、**松永妙精**の孫が永種で有ると書かれている。

阿波国の犬墓説

- 徳島県阿波市 **市場町犬墓**の出身とする説。
- 犬墓には松永久秀が築き、阿波在住時代に居城としたとされる**松永城跡**の石碑がある。
- 松永久秀の末裔は江戸時代には**地元の庄屋**となり、今でも子孫は名士として地元では敬われている。
- 久秀と同じ『五三の桐紋』を家紋とする**松永家**のお墓が多数あり、傍流の『松尾家』『福永家』の表札も沢山ある。
- 城王山の頂上にある**日開谷城**は南北朝時代に南朝の武将・新田義宗が築いたとされ、戦国時代に松永久秀が松永城の出城として利用したとされている。
- しかし、**三好元長**が阿波国から渡海し畿内入りした戦闘時の史料に**松永姓の武将**はおらず、史実性は低いとされるが、改姓した可能性もある。

松永城跡石碑





加賀国出身の松永氏が阿波に来て当地に城を構えたという由緒書に基づく。

この松永城も**天正5年(1577年)**に落城したと伝えられている。

久秀没後にその子孫が当地に戻り徳島藩主・**蜂須賀氏**に仕えたといわれている。

この地域に多い松永姓は久秀一族の末裔である可能姓が高いと思われる。

播磨国説

- この説で用いられる**家系図**では、大概の説で謎とされている久秀の**父**や**祖父**の名前、**松永家の発祥**や**由緒**まで確定している。

祖父は久松、父は三五右衛門清秀とされ、**加賀国**から**播磨**に流れてきた一族。元は九州の**大宰府**で役人を勤める家系だったと伝承されている。

- 久秀の優秀な役人氣質は、遙か遠い御先祖様の遺伝なのか。
- 久秀本人は、自分は**藤原氏**の出身だと主張。
- のちに將軍・足利義輝から『桐の御紋』の使用を許されると源氏と由緒を訂正、**源久秀**と名乗っている。

家族・親類縁者について

- **父親**が誰なのかは**不明**。

一説には

父:松永三五左衛門(清秀) 誕生地は富山県の「松永郷」

母:林氏の娘(林貞禪尼)

- **母親**は1485年生まれの1568年没である。
- 名前や出自は不明だが、1556年(弘治二年)に病に臥した際には三好長慶もその容態を気にしている。京都の東寺は、安井宗運を彼女の療養先である堺に派遣した。
- 宗運が堺に来た頃には既に母親の病状は快方に向かっており、病気が癒えたあとも**堺で暮らし**、1568年(永禄十一年)2月15日に**八十四歳**という長寿を全うして亡くなった(多聞院日記)。

久秀の妻

- 正室が**三好勝姫**(三好長慶の娘) ⇒ 幼すぎる
- 側室に**刑部卿春子**(ぎょうぶきょうはるこ)。
 - 一宮成助の娘 ⇒ 姉の間違いか? 久通の母?
- そして**左京大夫局**さきょうだいぶのつぼね(三好長慶の側室もしくは三好義継の正室) ⇒ 根拠なし 単なる噂か?
- 久秀は『主君・**長慶の娘を妻**にしておきながら、三好家を疎んじて横暴を極め、終いには**長慶の姪**(春子)や**妻**(左京大夫局)にまで手を出した』
 - ⇒ 極悪人であるとされてきた。

諸説に拠ると、久秀の側室・妾は多数(呉竹、於乙、奈緒)おり、その子供たちは久秀没後も生き残ったと言われている。

- 信頼のおける**一次資料で確認**が出来ている一人は『**松永女房**』。
- 長慶の娘・勝姫だとの説があるが？
- 久秀の嫡男**久通**は1543年生まれ。彼の母は??
- 1543年に長慶は24歳。その娘とすれば子を生む齡ではない。

『**松永女房**』 ⇒ 長慶の娘・勝姫ではない？

または、久通の母は別に居た。

- もう一人の妻は、朝廷の武家伝奏で近衛家の家司だった広橋国光の妹・**保子**(やすこ)。
- 保子は時の関白・一条兼冬に嫁いていたが、兼冬が1554年26歳で急死。
- その後、保子は1555年、久秀(46歳?)に嫁ぎ、継室に収まった。
- **関白の未亡人**を継室にできる程、久秀の実力は強大であった。

愛した女性達には深い哀悼を示し 厚く供養

- 久秀が大和国、**多聞山城**に本拠を移すと、**保子**も一緒に赴いたが…1564年(永禄七年)3月19日に亡くなった。(享禄天文之記)
- 久秀は彼女を弔うため、当時の臨済宗大徳寺派の高僧を招いて**盛大な葬礼**を営む。
- さらに、長慶が三好家の菩提寺として開基した堺・南宗寺の裏手に**勝善院**を建立。
- 久秀は保子を主君と同格の待遇で弔っており、それゆえ保子への愛情は深かったと考えられる。

久秀の子供

- 松永久通は天文12年(1543年)松永久秀の嫡男として誕生。
- 永禄6年に家督を譲られ多聞山城主となる。
- **子供**は、久秀が「松民」に宛てた書状によると「久通二兄弟もなく」とあり、**松永久通**一人しか確認できない。
- ただし、『多聞院日記』によると信貴山城落城前の10月1日に松永金吾(久通)が楊本城で殺害されたとあり、**信貴山城で自刃**した「松永父子」の**息子**は久通とは別かも。(秀次宗秀)
- 記録者の多聞院英俊は十市氏の一族であり、日記には金吾の妻である土市氏の娘「御なへ」と親しかった。
- 松永金吾(久通)は、永禄3年に、河内観心寺に禁制を掲げたとされ、同6年に従五位下右衛門佐に叙任されている。
- 「金吾」という称号は衛門府の唐名で、久通が右衛門佐に任ぜられていることから、松永金吾は久通であると思われる。

久秀の養子(実子?)

- 久秀は大叔母・妙精の孫の永種を養子に迎える。
- 妙精は駿河の名門豪族・入江盛重に嫁いでおり、その子政重が永種の父であり、下冷泉家^{れいぜいけ}藤原為孝の娘が母である。
- 松永永種は、久秀謀反時には北山に逃げて生き延びた。
- その子、松永貞徳は、里村紹巴に連歌を、細川幽齋に和歌を学び俳諧の貞門派を作る。
- そこから北村季吟が出て、その弟子は柳沢吉保や芭蕉である。
- また松永貞徳の子が、朱子学者の松永尺五であり、その弟子に貝原益軒が居た。
- 永種は松永久秀の子で入江の大叔母に預け、入江姓にした。
- 織田信長の死後、松永の本姓に戻したという説がある。

松永長頼

- 兄・久秀と共に三好氏の家臣となり、兄を補佐した。悪名高い兄に対して、**誠実で武勇**に優れ、主君の**三好長慶**から**信頼**された。
- 三好家中での出世は兄より早く、**久秀は弟の七光り**で三好家中の地位を高めたともいわれる。
- 長慶が上洛すると、長頼は足利**義輝**から**京都防衛**を任される。
- 長慶から**丹波方面**を任された長頼は**内藤国貞の娘**を娶り、内藤家の跡目は長頼の子の千勝が継承した。
- 長慶の下で、北白川の戦い、教興寺の戦いにも丹波国衆を率いて出陣し、三好政権下の**有力な軍団長**であった。
- 永禄4年の若狭出兵で、武田義統との戦いに敗れ、波多野氏などの国人衆の蜂起を招き、**永禄8年**、黒井城を攻撃中に**戦死**。
- 松永長頼には、**キリシタン大名**の息子・**内藤如安**じょあんの他に、娘の**ジュリア**がいる。高山右近、内藤如安と共に、娘のジュリアもマニラへ追放された。

松永久秀のもう一人の弟

- 久秀には、もう一人、**弟が存在**した可能性がある。
- 『九州治乱記』の記述によると、肥前国與賀の蜜蔵寺へ**空圓**という旅の僧が現れ、龍造寺隆信はその者に帰依し、光照寺の住職とした。
- この空圓、天正5年に隆信が千々石直員を攻めた際に、
「我は龍造寺與賀・光照寺が寺僧・空圓。
実は**松永弾正が弟**なるぞ。出家とて侮るなかれ」
と述べ、敵を四方八方に追い散らして討ち死にしたと記述される。

明応の政変

- 明応2年(1493)、管領の**細川政元**が、10代将軍・**足利義植**を廃し、11代将軍に**足利義澄**を擁立。
- 細川政元には妻子がなく、**養子**に迎えられた**澄之**、**澄元**、**高国**の三者間で、家督争いが起きる。
- **細川高国**が**台頭**し、**澄之**を滅ぼし、細川**澄元**を阿波へ追い落とし、家督を継いで**管領**となった。
- 今度は大永元年(1521)に**足利義晴**を12代将軍に擁立。
- 大永6年(1526)、高国によって阿波に追われていた細川**澄元**の**子・晴元**が、**三好元長**に**擁立**され挙兵。
- 晴元は畿内に攻め込み、享祿4年(1531)に**細川高国**を滅ぼす。
- 堺に本拠を置き、将軍・足利義晴とも一度は手を結び、管領に就任

三好長慶誕生

- 大永2年(1522)、**三好長慶**は阿波国で生まる。
- 父は**三好元長**で、細川晴元を管領に就任させた功労者。
- ところが天文元年(1532)、一向宗門徒との戦いで、元長は主君・**晴元の謀略**により、**自害**に追い込まれる。
- 三好長慶は阿波に逃れるが、翌年、**12歳**で父の跡を継ぐ。
- そして、更に翌年の天文3年、**父の敵**でもある**細川晴元**に仕える。
- 天文5年、細川晴元に従って上洛した**長慶**は、天文8年、**摂津の西半国**の支配を任され、**越水城**に本拠を置く。
- 天文11年、木沢長政を、太平寺の戦いで打ち破った**長慶**は、細川晴元の被官の中で**筆頭**の地位に昇る。

久秀は何時から三好家の家臣となったのか

- 最初の主君だった**三好元長**が自害に追い込まれた後、**久秀**は彼の後継者、13歳年下の**三好長慶**に**仕える**こととなるが、何時から家臣となったかは**不明**である。
- 最近の説には、1526年久秀19歳の時、元長生存時から三好家に仕えていたが、**長慶と共に堺から逃れて阿波**に下ったとも。
- 天文2年(1533年)頃より**三好長慶の右筆**として仕えたのではないかとも言われている。
- 久秀が歴史に登場するのは、三好氏が摂津の半ばを支配下に置いた1539年以降のこと。
- 摂津をおさめるにあたり、長慶は土地の者をあらたに召し抱えているから、そのなかに久秀が含まれていた可能性は高い。

- 久秀の史料における初見は天文9年（1540年）である。
- 天文9年（1540年）6月、長慶が西宮神社千句講用の千句田二段を門前寺院の各講衆に寄進する内容の書状を33歳の久秀が弾正忠の官名で伝達している。
- 同年12月、堺の豪商・正直屋の購入地安堵判物にも久秀が副状を発給して居る。
- このころ奉行の職にあったと思われ、主君から一定の信頼を得ていたことがわかる。
- 三好長慶が、越水城主として摂津下郡半国の守護代になり、初めて畿内での統治を行った際に外様の家臣として取りたてられ活動していたと見られる。
- 天文11年（1542年）には三好軍の指揮官として、木沢長政の討伐後、大和国人の残党を討伐するため、山城南部に在陣した記録がある。
- この頃には官僚だけでなく武将としての活動も始めていた。

松永久秀の邸宅



松永弾正の邸 [L2D] 松永弾正は三好長慶の有力な被官で、長慶が勢力を伸ばすにつれて彼の活動も活発化していくが、所司代になったなどの俗説は、いまは排されている。近年は弟長頼の方を評価する見方もある。

1547年には、相国寺の門前に久秀は住んでいたという

- その後1549年(天文18年)に**長慶**がもう一人の仇敵・**三好政長**を摂津榎並で討ち滅ぼす。
- 続いて、長慶と敵対する細川晴元を相国寺の戦いで破り、松永久秀の株は大いに上がった。
- その後、**三好長慶**が**細川晴元**と**將軍・足利義輝**を追放し、彼らに替わる御輿として**細川氏綱**を**管領**に推戴した。
- 氏綱を傀儡とし、自身はその管領代として幕府の実権と機内の覇権を握り『**三好政権**』を樹立する。
- 「**織田信長に先行する天下人**」と称された政権の特色は、幕府権力や將軍権力をバックに持たなかったことだ。
- 長慶は將軍権威を必要とせずに論争を解決していった。
- 將軍も管領も「あつてなきがごとし」と言う状態となった。

久秀 撰津滝山城城主となる

- このような政権を樹立した長慶のもとで**台頭**したのが、**松永久秀**である。
- 1552年(天文20年)には長慶が京都支配のために本拠地を**撰津芥川城**へと移転。
- 長慶が都の実質的な支配者となると、久秀もこれに同行し『**弾正少忠**』に出世する。
- 京都の寺社や公家と三好家の調整役として奔走し、**京都の治安維持や税金徴収の為の奉行職**を拝命。
- 本拠を越水城から芥川山城に移した長慶の支配地は山城、丹波など七カ国に及んだ。
- 久秀は、1557年(弘治2年)には、ついに**撰津滝山城城主**に就任。

芥川山城跡

- 芥川山城は、長慶が1553年に入り、家督を息子の義興に譲って飯盛城に移る60年まで居城として近畿一円を支配。
- 重臣の松永久秀も、芥川山城で頭角を現した。
- 長慶の死後、三好勢を破った織田信長は足利義昭と共に芥川山城に入城した後、京に入った。



高槻市芥川城跡の三好長慶像



「文武両道 理世安民」の
文言が刻まれている。

理世安民

「道理を持って世を治め、
民を安心させる」

久秀の抜擢

- **松永久秀の抜擢**は、三好政権における**人事の特殊**さを表していると指摘される。
- 低い身分、外様からの重臣への抜擢は他の大名家でも見られる。
- しかし、上杉家は樋口兼続に直江家の後を継がせ、北条家は福島綱成に北条の名字を与え一門に列席させるなど、**抜擢するに**応じて相応の**家格・地位・領地・家臣団**を与えている。
- 滝川一益や明智光秀を外様から抜擢した織田信長も、家格という観点から、**光秀や丹羽長秀**に**惟任氏、惟住氏**の名跡を継がせている。
- これらと比較して、三好長慶は久秀を登用し、彼は三好政権で枢要な地位につくほどの重臣となるが、久秀は阿波時代からの三好譜代の名跡と家格を継承してはいない。
- これは三好家の**人事登用**が従来の**家格秩序**にとらわれないものであったことの証左と言われる。

信貴山城を修復し居城とする

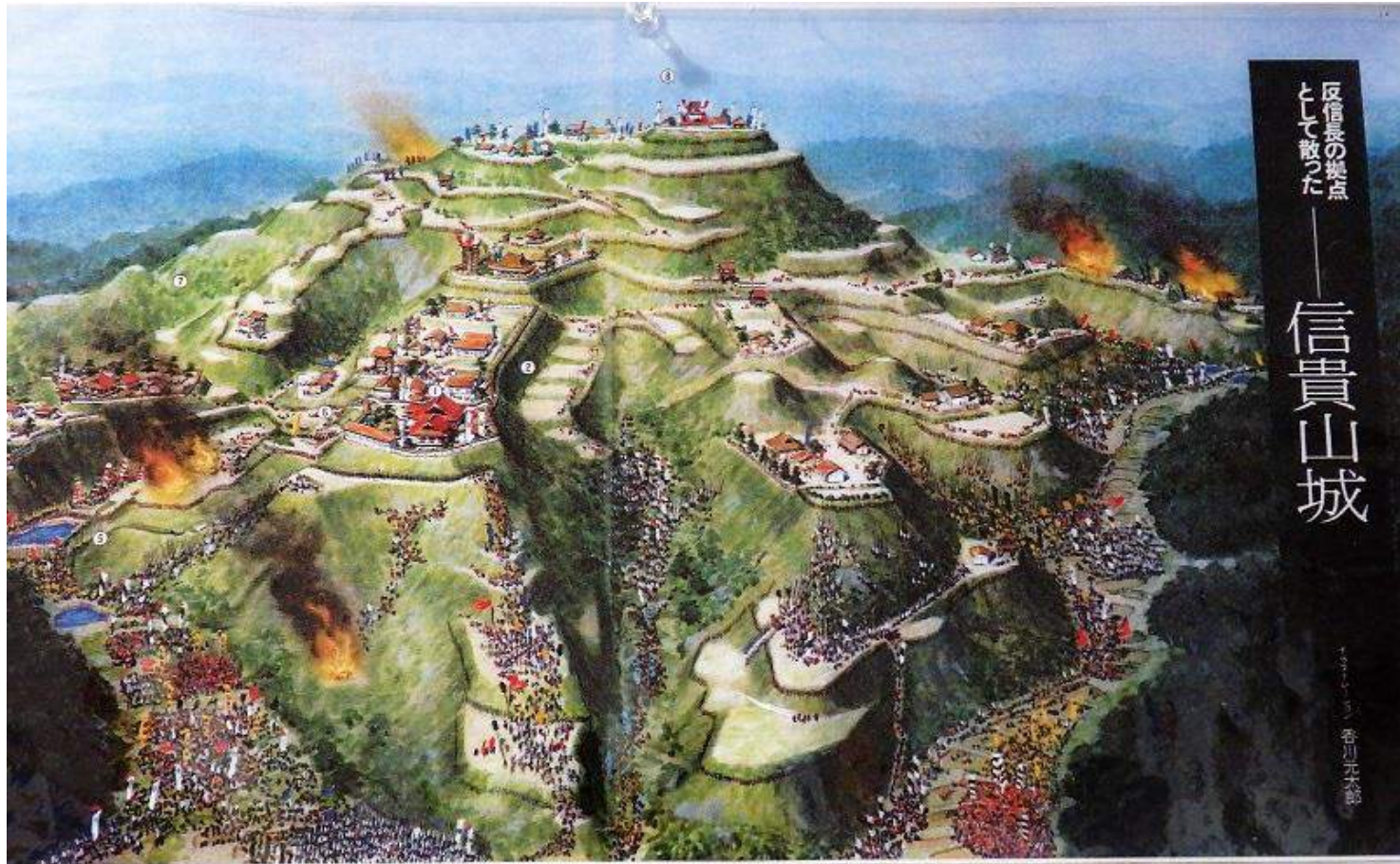
- 永禄2年、部下の楠木正虎（楠木正成の子孫）が、北朝から朝敵として扱われていたが、これを赦免して欲しいと正親町天皇に交渉する。
- 正虎は赦免された上に河内守にも任官された。この楠木氏の朝敵赦免には足利義輝も関与しており、彼も赦免に同意し許可した。
- 久秀は同年5月の河内国遠征に従軍し、戦後は長慶の命令で大和国へ入り、筒井順慶の本拠筒井城を陥落させ追い払う。
- 筒井氏の所領や大和守護の座にあった興福寺の所領等、**大和国の北半分を征服**し、松永久秀個人の直轄地として、与えられた。
- 同年、長い間放置されていた大和国の**信貴山城を修築**して居城とする。
- この時に四層からなる**天守閣**を建築『甲子夜話』。

信貴山城跡

信貴山城は天文5年(1536)に木沢長政によって築かれた。木沢長政は信貴山城を拠点に大和の有力国人越智氏を制し、かつては大和守護として巨大勢力を誇った興福寺も長政に降伏した。



信貴山城



松永屋敷跡

松永屋敷跡

信貴山城は東西550m、南北700mに広がる中世山城で、多くの郭や切岸・堀跡・門跡等が残り、木沢長政・松永久秀の築城が知られる。

この尾根筋の北側の部分には、斑鳩町教育委員会蔵の「信貴山古城図」(江戸時代)に、「松永屋敷」の記載がある。尾根を大規模に造成して平坦地を造り、土塁等で防御、東側に複数の門跡を配すなど、城内での進んだ構造から、松永久秀の居館部分として相応しい構造といえる。

(解説・画像提供:平群町教育委員会)



- 1560年(永禄3年)には興福寺を破って大和一国を統一する一方、久秀は**弾正少忠**から**弾正少弼**(だんじょうしょうひつ)に昇進。
- 翌年には朝廷から従四位下の官位を授与され、將軍義輝から桐紋の使用を許可される。
- 久秀は、室町幕府からも、三好義興が義輝の相伴衆に任命されると同時に御供衆に任じられる。
- この昇進と拜命は、長慶の嫡男・**三好義興**とほぼ**同待遇**である。
- しかし、三好家の実権は没するまで長慶が握っていた。
- つまり三好家の実質的なトップは最期まで長慶であり、久秀は長慶を出し抜こうとしたりその意に反した形跡はない。
- また、久秀は三好長慶から大和一国の管理を任され、その権勢は非常に強く、一国の大名のような立場になっていた。
- そしていよいよ、多聞山城の築城に着手する。

多聞山城

- **眉間寺山**(標高115m)に築城された。
- 東に奈良への入り口である奈良坂を、更に南東に東大寺、南に興福寺を眼下に見る要地に位置し、**大和支配の拠点**となった。
- 曲輪全体に、寺院や公家などの屋敷にしかなかった礎石と石垣を使用して、壁には分厚い**土壁**、**瓦葺の屋根**の建物を築いて奈良の街の支配と大和全体を睥睨した拠点の**先進的な平山城**だった。
- 城内には本丸に主殿、会所、庫裏の座敷など**豪華な建築**が建ち並び、庭園、金工の太阿弥の引手などの内装や狩野派絵師の絵画、座敷の違棚や茶室の落天井等の造作など、**豪華な城郭**であり、連結した西の丸には重臣の屋敷や、家臣の家が建てられた。
- そして、「**高矢倉**」と呼ばれた四階櫓があり安土城をはじめとする**天守の先駆け**と言える。
- また、罌上に**長屋形状の櫓**が築かれ、これが**多聞櫓**の始まりであるとされる

多聞城跡



多聞城跡石碑



多門櫓

- 城壁の上に長く続く櫓のことを多門櫓と言う。
- 多門櫓は、土塀の代わりに城壁の上に長く続くように建てられ、本丸、二の丸といった重要な曲輪に建てられた。



今治城

義輝の側近になり、 三好氏と將軍家を取り持つ

- 1561年、久秀は**義輝**から**桐紋**の使用を許され、**従四位下**の官位を与えられるなどの好待遇を受ける。
- この時点で主君の**長慶**や**義興**と同じ身分に上っており、幕府や朝廷から、三好氏の家臣の中でも、特に重要な人物だと見なされていたことがうかがえる。
- **久秀**はかつて、義輝と長慶が争っていた頃には、**義輝**を「悪巧みをして長慶との約束を何度も反故にしているので、京を追放されるのは天罰である」と**弾劾**していたこともあったが、この頃には**関係が改善**されていた。
- 久秀は**義輝**の側に仕え、**御供衆**として数多くの仕事をこなした記録が残っている。

畿内における 最大の実力者となる

- また、**継室**（後妻）として公卿である**広橋国光の妹**を迎えたことで、朝廷との関係が深まっていった。
- こうして**三好氏**と**将軍家**と、**朝廷**とも良好な関係を築いたことで、久秀の権勢は**絶頂期**を迎えることとなる。
- この頃の久秀について、

「天下の支配権を我が手に奪ってほしいままにし、畿内では彼が命令しなければ、何事も行われなかった」

と書かれた記録が残っている。

大和一国の主となる

- 将軍との抗争が終わり、政情が安定したことで、**三好氏**は畿内で順調に勢力を伸ばし、ついには**10ヶ国**を支配するほどになる。
- その過程で、長慶は**久秀**に**大和一国**を支配する権利を認め、久秀は大和一国の主となり、国持ち大名と同等の地位を得る。
- その後は河内で敵対する**畠山高政**を破って紀州に追放し、長慶に逆らった政所執事の**伊勢貞孝**を討ち果たすなど、武功を積み重ねていった。

三好氏の一族が次々と死去する

- 1561年に、長慶の弟である**十河一存**が病死(落馬とも)。
- 1562年には同じく弟の**三好実休**が戦死。
- そして1563年には嫡男の**三好義興**が病死するなど、長慶の身边で**不幸が相つぐ**。
- 一存や義興については久秀による暗殺説もあるが、一存の死因は落馬、義興は病死とされている。
- このため、畿内における覇権を確立しつつあった長慶は、急速に気概を失っていった。

長慶の死と、義継の継承

- 永禄7年(1564年)5月9日、三好長慶の弟である安宅冬康の死去により、三好家では久秀に並ぶ実力者は、阿波で国主を補佐していた篠原長房のみとなる。
- 1564年になると、義興の後を追うようにして、**長慶**もまた43才の若さで**病死**してしまう。
- 長慶が死没すると、しばらくは三好三人衆(三好長逸・三好宗渭・岩成友通)らと共に長慶の甥・三好義継を担いで三好家を支える。
- しかし、この後に三人衆と義継が起こした大事件によって、畿内の情勢は激変してしまう。

足利義輝の殺害

- 1565年に、**義継**と**三好三人衆**、そして久秀の嫡子・**久通**が1万の軍勢を率いて京に入る。そして彼らは義輝の住居である二条御所を襲撃し、白昼堂々と**将軍を殺害**してしまう。(永祿の変)
- これは義輝が長慶の死を契機に、将軍の権力を強化し、親政を行おうとしたことに、三好一党が危機を感じて断行したのだと言われている。
- この殺害事件は**久秀が主導**したという**説**があるが、久秀はこの時に大和にいて、京での襲撃には参加しておらず、**事実では無い**。
- しかし、嫡子の久通が襲撃に参加していることから、ある程度の関与はしていたものと疑われる。
- この後、三好勢は義輝異母弟の鹿苑院院主周髡をも殺害している。

- 永禄8年(1565年)7月 永禄の変から2か月
- 長慶死後の三好氏の内部では、久秀と三人衆の主導権争いによる対立が深まっていく。
- 三好三人衆は阿波を本拠とする四国側の勢力で、畿内を根拠地とする久秀とは利害が異なっており、あまり関係がよくなかった。
- 三好三人衆は、三好義継を傀儡にして三好家の実権を握り、足利義栄を将軍にすべく、時の関白、近衛前久の承認を得て準備を進めていた。
- 他の将軍候補には義輝の弟・義昭がいたが、彼は事件当時に、大和にある興福寺の僧になっていた。
- 久秀は義昭を保護(幽閉)していたが、細川藤孝等により義昭が興福寺を脱出し、越前に逃れたことにより、三人衆は久秀の責任を追求し、両陣営の関係は完全に破綻。

大和での戦い

- **翌、永禄9年、三人衆**は、大和の戦国大名として、かつては勢力を誇っていた筒井家の当主・**順慶**と手を結び、**久秀の大和支配を揺さぶる。**
- そして**三人衆**の軍勢が大和に侵入し、順慶や寺社勢力と協力して、久秀の新たな居城となっていた、**多聞山城**を包囲した。
- 久秀は築城を得意としており、彼が築いた多聞山城もまた、**堅固**な城塞であった。
- このため、兵力に勝る三人衆の攻撃をよく持ちこたえたが劣勢の久秀は大和の支配を失うこととなる。

義継が出奔 久秀を頼る

- 三人衆は足利義栄の擁立にかまけ、長慶の後を継いだ**三好義継の立場を軽視**するようになっていく。
- **義継**は、本来の後継者である**義興の代理**でしかなかったため、三好氏における権力基盤が弱く、ないがしろにされがちだった。
- それに加えて義栄が偏重されたこともあって、義継は三人衆に対して不満を抱くようになる。
- やがて永祿10年(1567年)2月、三人衆よりも、長慶に忠実に尽くしていた**久秀を頼った方がよい**のではないかと、**義継は出奔**し、久秀のもとへ。
- **三人衆**は三好氏の本拠である阿波を抑えて**強勢**であったため、久秀はこれまで苦戦を強いられていたが、義継が久秀を頼ったことにより、**勢力**を盛り返し、4月7日に堺から**信貴山城に復帰**した。
- これ以後の**久秀は義継と行動**をともにしており、長慶に対するのと同じく、**忠実**に仕えている。

東大寺の戦い

- この事態を受け、一度は引き下がっていた**三人衆**が再び大和に襲来し、**東大寺**に陣を構える。
- 勢力を盛り返した久秀は、三好三人衆の軍勢と対峙。永禄10年(1567年)10月に、三人衆の軍が陣を布く**東大寺への奇襲に成功**し、見事に畿内の主導権を奪い返した。
- しかし、この時の戦火によって10月10日、東大寺の**大仏殿が焼失**し、大仏の首も落る。
- この火災は、**放火**なのか**失火**なのかすら明らかでなく、「放火である」としても「松永方が放った」「三好方が放った」と主張が分かれている。
- 永禄11年(1568年)には信貴山城に再び危機が訪れ、6月29日、三人衆方の三好康長が信貴山城を攻め落とした。

信長が上洛、久秀は臣従する

- 永禄10年(1568年)に**信長が上洛**を開始し、これに抵抗する南近江の六角義賢を短期間で撃破すると、京を抑えていた**三好三人衆**は、恐れをなして**撤退**。
- こうして信長が京に入ると、**義昭は15代将軍**の地位を得る。
- 久秀は、いち早く**信長に臣従**を申し出て、その印として「**九十九髪茄子**」を差し出した。
- **義昭**は、久秀は兄・**義輝の仇**と、これに反対するが、信長は久秀を受け入れ、**大和一国を切り取り次第**にしてよい、という待遇を与える。
- 信長はこの時はまだ中央に進出したばかりであり、京や畿内の事情に詳しく、朝廷との関わりが深く、大和に一定の勢力を保持していた**久秀**は**利用価値**があった。
- 久秀もまた、そうした自分の利用価値をわかっていて、信長に売り込んだのだと思われる。

大和興福寺衆徒宛朱印状

「柳生文書」

- 御入洛之儀、不日可致供奉候、此刻御忠節肝要候、就其対多聞、弥御入魂専一候、久秀父子之儀、不可見放之旨、以誓紙申合候条、急度加勢可申候、時宜和伊可為演説、猶佐久間右衛門尉可申候、恐々 謹言、十二月一日

- **御入洛**の儀、不日供奉いたすべく候、この刻御忠節肝要に候、それにつき**多聞**に対して、いよいよ**御入魂専一**に候、**久秀父子**の儀、**見放すべからず**の旨、誓紙をもって申し合わせ候条、きつと**加勢**申すべく候、時宜和伊演説たるべく、なお佐久間右衛門尉申すべく候

恐々 謹言、十二月一日

信長 (朱印)

興福寺御在陣衆御中

将軍義輝の後継争い

- 将軍義輝の弟**覚慶**は、細川藤孝などの義輝の旧臣に擁立され、永禄9年2月に還俗し足利**義秋**と名乗り、4月には従五位下・左馬頭さまのかみ（次期将軍が就く官職）に叙位・任官した。
- これに対し三好三人衆は、**阿波公方**・足利義維よしつなの子である**足利義栄**を第14代将軍候補として擁立し、永禄10年1月に義栄は従五位下・左馬頭に叙任された。
- **義栄**は、**永禄11年2月**、朝廷から**第14代将軍**宣下を受ける。
- **永禄11年9月**、**足利義昭**を奉じて**織田信長**が上洛。
- **三人衆**は畿内で信長に抗戦したが、**敗れて阿波**に逃れた。
- その直後、**義栄**は以前から患っていた腫物が悪化して**病死**する。
- 久秀は信長に臣従し、障害がなくなった**義昭**は同年**10月18日**に**15代将軍**宣下を受ける。

久秀、再び幕臣となる

- 永禄11年には、久秀は娘を信長の嫡子信忠に嫁がせ、足利義昭の妹を娶った三好義継とともに幕府の重鎮としての地位を獲得。
- この時に、**三好義継**は、久秀とともに義昭の**御供衆**に任じられ、かつての義輝の時と同じ待遇を受ける。
- この後の**久秀**と**義継**は、**信長**に従いつつ、**義昭**にも仕え、かつての長慶・義輝の両者に仕えていた時と同じような活動をしていく。
- この頃には、三人衆と協力していた**筒井順慶**が、大和で久秀よりも**強勢**となっていた。
- しかし久秀が信長に臣従したことで、**佐久間信盛**や**細川藤孝**らが率いる2万の**援軍**が大和に送り込まれ、この状況が覆る。
- **久秀**は信長や義昭の家臣たちと協力し、**大和の領地を奪還**、大和の支配者の地位に返り咲くことに成功。

金ヶ崎の戦い 信長の撤退を助ける

- **信長**は上洛後、畿内周辺の諸勢力を討伐し、越前の**朝倉義景**にも上洛を要求するが、義景がこれを拒否したため、軍勢を率いて越前に攻め込む。
- しかし**金ヶ崎城**を攻め落とした直後に、**浅井長政**が裏切ったという情報が届く。
- 南北から挟撃される形になった信長は、殿を明智光秀や木下秀吉らに任せ、京に向かって**逃走**する。
- この時に久秀は、信長が近江の豪族・**朽木元綱**の領地を通過する際に、その命を助ける働きを見せる。
- 朽木元綱は初め、信長を殺害するつもりだったが、**久秀が必死の覚悟で元綱を説得**して味方につけ、無事に近江を通過できた。

三好三人衆との和睦

- **浅井長政**が敵に回ったことで、**信長**は**苦戦**するようになり、摂津に再度進出していた**三好三人衆**と**和睦**。
- この**交渉**を**久秀**が担当し、**信忠**に嫁ぐ予定だった**久秀の娘**を**信長**の養女にし、その上で**三好長治**に嫁がせる条件で話をまとめる？
- その結果、**義昭**と**三人衆**との**和睦**も成立した。
- **久秀**としても、5年間対立した**三好長逸**ながやすら**三好三人衆**と**和解**することとなった。
- この時点までは**久秀**は**信長**に対し、**忠実**な働きぶりを見せており、以前と変わらぬ有能さを示している。
- しかし、この頃には**摂津**や**伊勢**に勢力を持つ**石山本願寺**も敵に回っており、**信長**が**東西**から**包囲**されて**苦境**に陥ると、やがて**叛意**を高めていく。

信長包囲網

信長への裏切りを決意

- 1571年になると、甲斐や信濃を支配する**武田信玄**もまた、信長への敵対姿勢を見せるようになる。
- そして**義昭**も**信長**と**不仲**になり、各地の大名たちに、上洛して信長を討つようにと働きかけるようになる。
- こうした情勢の変化を受け、**久秀**も信長に従い続けると、やがて**我が身が危うくなる**と判断。
- **義昭に通じ**、**信玄**とも連絡を取り、**信長包囲網に加わる**ための準備を進める。
- しかしこの頃、本国阿波では**三好長治**が**篠原長房**を殺害し、家中の不和を招くなどの混乱もあり、三好軍は徐々に衰えていく。

信長に反旗を翻す

- 1572年 **信玄**が本格的に上洛のための軍事行動を開始。
- 久秀は**三好義継**や**三好三人衆**と結託し、信長への**反旗**を翻す。
- しかし、天正元年1573年の4月に、**信玄**が上洛作戦の途上で**病死**したことで、信長打倒の機運は沈静して行く。
- この年の7月には**義昭**が**挙兵**するが、すぐに信長が率いる7万という大軍に包囲され、**京から追放**されて、**室町幕府**は**実質滅亡**した(実際には**頼幕府**として残った1576~1588)。
- さらに**朝倉義景**や**浅井長政**も相次いで信長に討ち取られ、**包囲網**は**完全に瓦解**した。

- こうして梯子を外された**久秀**らは**孤立**。
- 11月には**三好義継**が、**槇嶋城**より退去した**義昭**を若江城に匿った咎を受け、**佐久間信盛**に居城を攻め落とされて**自害**。
- 久秀が40年に渡って支えてきた**三好本家**は、あえなく**滅亡**する。

信長に降伏

- この年、天正元年の年末に、**大和**も織田軍の侵入を受け、**多聞山城**が包囲された。
- もはや抵抗は不可能だと悟った久秀は**信長に降伏**し、**多聞山城を差し出した**ことで、命までは取られずにすんだ。
- しかし、**三好本家が滅亡**し、**三人衆**も信長に**駆逐**されたことで、かつて久秀とともに畿内を制した者たちの勢力は、もろくも消え去ってしまう。
- **久秀**は翌年、天正2年に岐阜に赴き、信長に謁見して**再度の臣従**を許されるが、**領地**の大半は**没収**されてしまう。
- この頃に**筒井順慶**もまた信長に服属しており、以後は順慶が信長の支援を受け、大和で**勢力を拡大**していく。
- 金ヶ崎などで信長に尽くしたため、命は助けられたが、一度謀反を起こした人間が重用されるはずもなく、以後の久秀は、**大和の一領主**として鬱々とした日々を過ごす。

多聞山城の破却

- 多聞山城は、永禄3年(1560年)に築城開始。永禄4年(1562年)には久秀が入城した。
- 天正元年(1573年)、久秀は15代将軍足利義昭と同盟し織田信長に反旗を翻したが、圧倒され信貴山城に立て籠り、ほどなく降伏。
- **多聞山城には明智光秀、次いで柴田勝家が入る。**
- 翌2年(1574年)、**信長**が検分のため**多聞山城に入城**。信長が正倉院に伝わる名香「**蘭奢待**」を切り取ったのはこの折である。
- 天正4年(1576年)に信長は**筒井順慶を大和の守護**に任じ、**多聞山城の破却**を命じる。

筒井順慶とは

- 久秀にとって**因縁のライバル**
- 筒井氏は**興福寺**一乗院に属する**有力宗徒**が**武士化**し、筒井城を拠点に戦国大名化していた。
- 当時の大和は**興福寺**の勢力が強く**守護職**の**存在しない国**であった。
- しかし、永禄2年から**松永久秀**が**侵攻**し、筒井氏は**劣勢**となる。
- 永禄の変の後、松永久秀は**筒井城を奪う**。
- その後、順慶は**三好三人衆**と**結託**し、筒井城を**奪還**する。
- 永禄10年には再び三人衆と**結んで大仏殿**を占拠して、多聞城の久秀と対峙したが久秀軍が東大寺に討ち入り、大仏殿が**焼け落ちる**。
- 信長が入洛すると、久秀は信長に臣従、順慶は**劣勢**となる。
- 元亀2年、順慶は明智光秀の斡旋で信長に臣従し、久秀も佐久間信盛を通じて信長に臣従したので、**久秀と順慶は一時和睦**する。

「麒麟が来る」の筒井順慶



父親は、駿河学

第二次信長包囲網 再度の謀反

- **久秀**は辛うじて生きながらえたが、三好氏本家が滅亡し、大和の支配権も失ったことで、前途への**希望を失い**、信長への**復讐**を密かに企むこととなる。
- 1576年**木津川の戦い**で**毛利軍**が勝利し、翌年には、**上杉謙信**が信長と敵対。
- これに**石山本願寺**と、中国地方の覇者である**毛利輝元**ら加わる形で、二度目の**信長包囲網**がしかれる。
- そして**柴田勝家**を中心とした数万の兵が、**謙信と対戦**するために北陸に向かった隙をつき、**久秀**は再び信長への**謀反**を起こす。
- これには、信長が**筒井順慶**を**大和守護**の地位につけ、優遇。
- 更に、かつての居城である**多聞山城**が**順慶**によって**破却**された。
⇒ **久秀**が自分の立場への**危機感**を強めた。

これらのことが、反逆の要因になったと考えられる。

信長から説得を受けるも、拒絶

- 天正5年3月、阿波の**三好長治**が細川真之や一宮成助との荒田野の戦いで破れ**自害**した。
- **阿波三好氏の凋落**が顕著となり、長宗我部の阿波侵攻が激しくなる。
- 天正5年夏、久秀は本願寺攻めのために詰めていた砦を焼き払い、嫡子の**久通**とともに、**信貴山城**に立てこもる。
- この時はまだ謙信が健在で、石山本願寺も頑強に抵抗を続けていたので、信長は久秀の謀反に驚き、安土城から**使者(松井友閑)**を派遣し、**翻意**を促した。
- 二度目の謀反を起こした者を相手にするには、ずいぶんと懇切な対応をしている。
- この信長の対応は、謙信に備えるために主力が北陸に向かっていたので、畿内は手薄だった、という状況によるところが大きい。
- 久秀は信長からの懐柔の言葉を**拒絶**し、**謀反を貫徹**する意思を表明。

謙信上洛を停止 信長の主力が帰還

- そしてここで、久秀にとって**最大の誤算**が発生。
- 能登の七尾城を攻め落とした後で、**謙信の行軍が停止**。
- 上洛はしない気配であると、柴田勝家から信長の元へと伝えられる。
- これは関東で北条氏政が動いたため、そちらを警戒して進軍を止めたのではないか、と言われている。
- これを受け、信長は主力を北陸から呼び戻し、嫡男の**織田信忠**を**総大将**として、佐久間信盛、丹羽長秀、羽柴秀吉らが率いた、4万の大軍を**信貴山城**に差し向ける。
- こうして久秀は、ついに**進退が窮まった**。

信長から討伐軍が送り込まれる

- 久秀の拒絶に激怒した信長は、10月1日筒井順慶や明智光秀、細川藤孝らが率いる5千の兵に、信貴山城の支城である片岡城を攻撃させる。
- 松永勢は1千の兵力で防衛するが、大きな被害を受けて**落城**する。
- 同日、「金吾」(久通)が楊本城(天理市)で楊本衆の手によって殺され落城する。
- 信貴山城への戦いは10月5日から開始された。
- 4万の軍が一斉に攻城を開始したが、信貴山城は簡単には落城しなかった。
- 信長はこの日、久秀の質子(久通の息子で久秀の孫、当時12歳と13歳)を洛中引き回しの上、六条河原で斬首した。

信貴山城の防衛戦

- 築城の名人である久秀が築いた信貴山城は防備が堅く、5倍の敵の攻撃を受けても、容易には落城しなかった。
- しかし**兵力差**に劣勢となり、久秀は石山本願寺に援軍を要請。
- その使者に**森好久**という武将を選ぶが、彼は織田軍に属する**筒井順慶**に内通。
- 順慶は、自軍の200の鉄砲隊を預けた上で、石山本願寺からの援軍だと偽って城内に戻り、**伏兵として活動**するように命じた。
- この裏切りによって、信貴山城は落城の危機にさらされる。

落城

- 10月9日より、再び織田軍による総攻撃が開始される。
- **明智光秀**の**与力**であった**順慶**は先頭に立って城門に攻めかかるが、松永勢から鉄砲や弓矢で攻撃を受ける。
- さらに討って出て来た部隊に切り込まれ、撃退されそうになる。
- しかし、この時に**森好久**が率いる200の鉄砲隊が**寝返り**を実行、各所に火を放ったことで、城は防御力を失う。
- 城内では討ち死にする者や、力尽きて自害する者たちが続出し、久秀はいよいよ追い詰めらる。
- **織田信長**は久秀に使者を送り、久秀所蔵の**平蜘蛛釜**を差し出し、降伏することを促す。
- だが、久秀はこれを**拒絶**して信貴山城天守閣に昇った。

切腹と放火

- もはや打つ手がなくなると悟った**久秀**は、嫡子の**久通??**とともに**切腹**し、城に火を放つ。(切腹はせずに焼死した、という説もあり)
- このために四層の天守閣が炎上し、久秀が所有していた平蜘蛛の茶釜も打ち砕かれる。
- この時に久秀が**平蜘蛛もろともに爆死**した、という俗説があるが、これは後世の創作。
- 焼け落ちた城からは久秀らの首が回収され、安土城の信長の元へと送られた。
- こうして一代で低い身分から大名にまでのしあがり、將軍の側近にもなった**久秀は、信貴山城とともに滅んだ**。
- その遺体は筒井順慶が回収し、達磨寺に丁重に葬っている。



彼はこうして燃える城の中で、愛する名品
を道連れに**68**年の生涯を閉じた。

極悪人なのか？

- 久秀は**将軍の殺害**や、東大寺の**大仏殿の焼失**に関与し、**信長への二度に渡る裏切り**など、後世から非難を受けやすい要素は多分にある。
- しかし、義輝の殺害は主導しておらず、東大寺大仏殿の焼き討ちも、三人衆の仕業であるという説があり、久秀が**積極的に悪事を働いた**、ということではない？
- 久秀は大和を支配するにあたり、**寺社勢力と対立**したため、死後に尾ひれがついて、過剰に悪人として非難されることが多くなったのではないか。
- また、異例の出世ぶりが**世間からの妬み**を買い、悪評が立てられやすい境遇にもあった。
- 松永氏は滅亡したため、**久秀を擁護する資料**を残す者がいなかったことも**極悪人の烙印**を押される原因となったのかもしれない。

三好本家には忠実に仕えていた

- 三好氏の一族を暗殺したという説もあるが、長慶らの死により、久秀が得をした形跡はない。
- 長慶から厚い信任を受けていたからこそ、基盤を持たない成り上がり者の久秀の権力が強かった。
- 久秀が長慶とその親族を害することは、久秀にとっては自殺行為である。
- **久秀は長慶・義興・義継と、三好本家に対しては忠誠を尽くしており、一度も裏切ったことはない。**
- こう見ると、梟雄と呼べるほど悪辣ではない。
- 出世欲は旺盛であり、朝廷に多額の献金をするなどして地位を得ていたが、それは特に際立った悪事だとは言えないだろう。

超一流の人たちに支えられる

- 久秀の妻の一人は、広橋保子である。久秀は保子を愛し、死去した際には奈良の音楽芸能を禁じた。
- その保子の兄は幕府と朝廷をつなぐ武家伝奏の広橋国光であり、保子の姉は後奈良天皇の室であった。
- 筆頭家老には、公家出身の竹内秀勝をすえ、身邊に
 1. 親王の教師 清原枝賢
 2. 楠木正成の末裔 **楠正虎**
 3. 新陰流の開祖 **柳生石舟斎**
 4. 高山右近の父 高田飛驒守ダリオを召し抱えていた。
- 当代一流の人達に久秀は支えられていた。
- ⇒ それだけ信頼されていた。
- 好かれていたのかも

- **信長に対しては二度裏切っているが、それでも信長は許そうとした。**
- **それだけ信長は久秀を気に入っていたのかもしれない。**
- **しかし、久秀にとって信長は、三好本家に匹敵するほどの存在ではなかったのではないか。**

- **長慶が早死にしたことで、三好氏は滅亡へと導かれたが、久秀にとっても、長慶が失われたことの影響は大きかった。**
- **もしも長慶が長生きをして天下を制していたら、立身出世の代表者として、後世まで語られるような存在になっていたかもしれない。**
- **しかし、主君の死後にその権力を継承できず、劣勢に追い込まれていく。**
 - ⇒ **そこに久秀の限界があったのだと言えるだろう。**

- **久秀敗死の5年後天正10年、天下を制した霸王・信長も、明智光秀によって自刃、焼死することとなる。**

足利義輝殺害の真実

- **三好・松永側は訴訟の取次**を求めて御所を訪れたが、**取次**の際の**齟齬**から戦いに発展したので、最初から**將軍殺害**を計画していた訳ではないとも言われている。
- 三好側の意図は**政治的要求**を行うために御所を包囲する「**御所巻**」と呼ばれるものであった。
- その要求は將軍の**妻妾**や**側近の処刑**を求めるもので、申次役の**進士晴舎**とその娘の**小侍従(義輝の愛妾)**の処刑が含まれていた。
- その為、申次を戸惑った**進士晴舎**が突然**自害**したことで「**手切**」とみなされて戦いが始まった。

* 進士氏は代々足利將軍家の奉公衆を務めた家柄であり、明智光秀は進士晴舎の子の進士藤延だとも言われている。

もし、**義輝**が殺害されていなかったら、**義昭**を奉じて**信長**が上洛することはなかった。

明知光秀も信長の配下になる機会を得なかったかもしれない。

久秀の運命も大きく変わっただろう。

大きな歴史の転換点であった。